

鳴つき

寺田寅彦

青空文庫

別べつちやく役やくの姉あが上はなが来て西の上あがり端はなで話はなしていたら要太郎が台所

の方から自分自分を呼んで裏しぎへ鳴なを取りに行かぬかと云う。自分はま

だ一度も行った事がないが病後の事であるからと思つて座敷しで書か

見よけんをしている父上父上に行つてもよう御座おんざいましよかと聞くと行く

はよいが傘をさして行けとの事であつたから、帽をかぶつてわる

い方の蝙蝠傘こうちりかさを持って裏門へまで行くと、要太郎はもう網をこ

しらえて待つていた。「別役べつやくの精せい様がこないだから連れて行く

れい云いよりましたがのうし。」「そうかそれでは呼んで来い」

とて下女をやつた。間もなく来たから連れ立つて裏門を出た。バ

ツタが驚いて足下から飛び出した。「いくら汚れてもよいように

きもの
衣物を着換えて来たね。」精は無言でニコニコしている。足には
尻の切れた草履ぞうりをはいている。小川を渡つて三軒家さんげんやの方へ出る。
あちこちに稲を刈つている。畔あぜに刈穂を積み上げて扱こいている女
の赤い帯もあちらこちらに見える。蜻蜓とんぼが足元からついと立つて
向うの小石の上へとまつて目玉をぐるぐるとまわしてまた先の小
石へ飛ぶ。小溝に泥どじょう鱒が沈んで水が濁つた。新屋敷の裏手へ廻
る。自分と精とは一町ばかり後をついて行く。北の山へ雲の峰が
出て新築の学校の屋根がきらきらしているが風は涼しい。要太郎
が手を上げたから余等は立止つて道にしゃがんだ。久万川くまがわの土手
に沿うた一丸の二番稲があつてその中に鳴が居ると見える。網を
斜めに下向けてしきりにねらっている。自分等も息を殺して見て

いるとたちまち頭の上でばさ／＼と音がする。蜻蜒とんぼが傘にとまっていたのが外ほかのとんぼと喰い合つて小溝へ落ちそうにしてぷいと別れた。溝からの太陽の反射で顔がほてるような。要太郎はやはりねらいながら田を廻っている。どうも鳴は居ぬらしい。後の方でダーダーと云う者があるからふりかえると、五、六間けん後の畔あぜみ道ちの分れた処の石橋の上に馬が立っている。その後についているのは十五、六の色の黒い白手拭かぶを冠かぶった女の子であつた。馬はどっちへ行こうかと云う風で立止つていると、女の子は馬の腹をくぐつて前へまわつてまたダーダーと云いながら新屋敷の方へ引いて行つた。鳴はやつぱり見えぬらしい。要太郎も少しだれ気味で網を高く上げて振るとバタ／＼と一羽飛び出して堤を越して見

えなくなつた。要太郎の指をさす通りにグサ／＼と下駄の踏み込
む畔を伝つて土手へ上ると、精の足元からまた一羽飛び出して高
く舞い上がった。二、三度大廻りをして東の方へ下りた。「何処どこ
へ下りましたぞのうし。」「アソコに木が二本あるネー。あの西
の方に桑があるだろう。あの下あたりのようだ。」要太郎は黙つ
て堤を下りて行つた。堤には一面すすき野のはぎばら菽茨がしげつて衣物に
ひつかかる。どう勘違いしたのか要太郎はとんでもない方へ進ん
でいる。声を掛けようかと思つたが鳥を驚かしてはならぬと思つ
て控えていると果然しぎ鳴は立つた。要太郎は舌打ちをしたと云う風
であつたが此方こつちを見て高く笑うた。そして二本並んだ木蔭へ足を
投げ出して坐つて吾等を招いた。「ドーダネ。マー一服やつて縁

起を直しては。巻煙草をやるか。」「ヤーありがとございます—
—。昨日は私の小さい網で六羽取りましたがのうし。」今に手並
を見せると云う風で。

野菊が独り乱れている。「精ドーダ面白いか。」「あつい」と
云いつつ藁帽をぬいで筒袖で額を撫なでた。「サーそろそろ行きま
しよう。モツト下へ行つて見ましょ。」小津神社おずの裏から藪やぶふち
を通つて下へ下へと行く。ところどころもみがら粃こ殻がらを箕みであおつてい
る。鶏は喜んであつちこちこぼれた米をひろつている。子供が小
流で何か釣つっている。「鮒ふなか。」「ウン。」精の友達らしい。い
つの間にか要太郎が見えなくなつたと思つていと遙か向うの稲い
村なむらの影から招まねいている。汗をふきふきついで行つた。道の上で

稲を扱こいている。「御免なさいよ。」「アイ御邪魔でございます。」
「實際邪魔であるので。要太郎を見ると向うの刈田の中をいかにも奇妙な腰付で網の中程を握って走っている。すると精が「居る居る——要太郎があんなに走り出したらきつと鳴が居る」と云う。なるほど要太郎は一心に田の中の一点を凝視みつめてその点のまわりを小股に走りながらまわっている。網の竿をのばしたと思うと急に足を早めて網を投げた。黒いものが立つと思うと網にかかった。バタ／＼している。要太郎も走る。精も走る。綺麗な鳴だ。ドレドレと精は急いで受取って足を握って羽をバタ／＼さす。

「綺麗な鳥よ、綺麗ジャノー。」
「遁にがしちや厭いやでございますよ。」
「ニガスモンカ。」早く殺さないと肉が落ちると云うので要太郎

が鳥の脇腹をつまむと首がぐたりとなった。脆もろいもので。これが手始めでそれからは取るは取るは、少しの間に五羽、外に小胸こむなぐ黒ろを一羽取った。近頃このくらい面白かった事はない。「今晚鳴の御化けが来るぜ。」「来たたら脇腹をつまんでやらあ。」

(明治三十四年九月)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴つき

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>